
とある科学の一時停止(サスペンド)

目黒 良輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の一時停止^{サスペンド}

【Nコード】

N8610Z

【作者名】

目黒 良輝

【あらすじ】

上条が学園都市最強の超能力者・一方通行との死闘の時、学園都市の間では一方通行に似た能力と容姿の少年・一時停止^{サスペンド}が動いていた。触れた物体の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る能力を持つ一時停止の物語が始まる！！

第一章 壊滅任務 Annihilation duty(前書き)

小説初投稿です、と言いたい所ですがこれで三度目位です。
頑張って書いたので是非読んで下さい。

「さあパーティーの時間だムシケラ共」
裏学園都市第一位 一時停止^{サスペンド}

第一章 壊滅任務 Annihilation duty

ここは第四学区。学園都市でも数多くの料理店が並ぶ場所で、食品に関する施設も多い。

無能力者の武装集団・スキルアウトとはまた違う無能力者の集団のアジトがこの学区の食品を保存する冷凍倉庫を改造している。

このような場所に大抵そのようなアジトは作らない、つまり死角となっているのだ。

今は午後9時頃、大抵の学生はもう寮にいないといけない時間であり行き交うのは帰宅する大学生や学校の教師が多い。

そんな中、黒い学ランを着た断髪の少年は息を切らしながらとある冷凍倉庫へ向かう。少年の手には学生カバンがある。

少年が冷凍倉庫に入るとまず感じる寒さが伝わらない。少年は不可解に思いながら奥へ踏み入る。

奥には男女合わせて20人程度の学生が騒いでいる。ある男は未成年なのに缶ビール片手に携帯を弄いじっていたり、ある男女は煙草タバコを吸いながらこつ騒いでいたり、ある男女は大人の育みをしていたりと健全な人達に害を及ぼすような行為をしている。

少年は挙動不審に奥へ進むとある部屋への扉を見付ける。少年は躊躇いなく扉を開ける。そこには緑髪でツンツンな頭をしている青年

が社長室にある椅子に腰掛けていた。少年はゆっくり青年に近付くと学生カバンを青年の前にあるテーブルにゆっくり置く。

「手に入れました……。これが幻想御手です……」
レベルアップ

「でかしたな。晴れてキミも俺達グリフィスの仲間入りだ」

青年は笑みを浮かべながら拍手をする。少年は次第に口元が上がり

「あ、有り難うございます帝王様!!」

「いいってことよ。ところでよお、キミ童貞?」

「は、はあ……」

少年は曖昧な返事を返すが帝王は軽く手を鳴らすと奥から半裸の美

女達が現れる。

「アイツまだ新品だからよお テメエ等の好きにしちゃっていいから
あー!!」

「イエーイ」 「坊や楽しい遊びをしましょ」 など少年に迫り犯され
ていく。

帝王は犯される少年の模様をにやけながら見ている。しかし、後に
大惨事が起きる事をまだ知らない。

同時刻、ある少年も第四学区を歩いていた。少年はスライド式の赤
い携帯を耳に押しあてながら歩いている。

『今回は第四学区の冷凍倉庫をアジトにしている無能力者集団グリ
フィスを壊滅する事だ』

「毎度毎度オレは何時もそのような事しかないのか？」

『統括理事会の護衛とかしたいのか？君はそんなの正に会わないだろ一時停止』
サスペンド

少年・一時停止サスペンドは電話の相手に珍しく同意する。彼自身、護衛とか守るのは肩身が狭い感じな為不向きだと自覚している。最も正に会うのはこのような人の排除が破壊ぐらいだ。

「反論が出来ないよ。よく読んでるな梶原かじわらさんよお」

電話の相手・梶原はフツと鼻で笑う。

『何年君の任務を依頼しているのか分かるかい？君の好き嫌いは馴れたのさ』

「そりゃどいつも」

一時停止サスペンドは話の件くだりが過去の方へ行くといい通話を切りポケットにし

まっ。そうこうしている内にグリフィスのアジトである冷凍倉庫に到着する。

サスペンド
一時停止はハアとため息を吐きながら

「さあパーティーの時間だムシケラ共」

サスペンド
一時停止は冷凍倉庫の入り口付近を触れると一気に前方に吹き飛ばすと同時に粉々に砕け飛ぶ。少し規模の大きい事をした為か今まではしゃいでいた男女は全員、サスペンド一時停止の方へ向く。
「パーティーはお終いだぜ」

サスペンド
一時停止は辺りを見渡し未成年の違反行為を見てハアとため息をすると頭を抱え

「この年で大人ぶるなんて楽しいのかあ？」

男女はサスペンド一時停止を見て驚愕している。実際はサスペンド一時停止とは知らない

が諸事情の問題である人物に見間違いをしているのだ。

「あれは……アクセラレータ一方通行？」

「学園都市第一位の超能力者が何故この場所に!？」

驚く少年少女達の中で逆立った金髪でガタイがいい男が一時停止サスペンドに近づき

「アクセラレータ一方通行か何だか知らねえがテメエが来る場所じゃねえんだよ」

ガタイがいい男は一時停止サスペンドの胸ぐらを掴むが掴んで数秒後、ガタイがいい男はバタリと倒れそのまま動かなくなってしまう。

「バカだな。人の能力を知らずに触れるから悪いんだ」

少年少女達はガタイがいい男を見てガタガタ震え出すと叫び声を上

げて逃げ出そうとする。

「オマエらは此処で人生終了だ……と言いてエが、無駄な命は留めてやんよ」

サスペンド下
一時停止は右手を構え軽く握る。すると少年少女達の呼吸が一気に止まっていく。止まっていない少年少女達はバタバタと倒れていく仲間を見て愕然としている。

「なっ!?!?……なんで……」

「簡単な事だ、オマエらの呼吸を停止させてンだよ。つつつても分かンねエよなアどうせ」

サスペンド下
一時停止が能力を説明する前に全員呼吸が止まり全員が倒れている。それを見たサスペンド下一時停止は軽く鼻で笑い

「自業自得だボケ」

「サスペンド
一時停止は倒れた少年少女達を無視して奥の部屋へ進む。そこには
学ランを着た少年しかいなかった。」

「何してんの？」

「あっ一方通行ア！？
アクセラレータ」

「サスペンド
一時停止は毎度毎度間違われる為馴れてきたが流石にイラッと来た
サスペンド
一時停止はチツと舌打ちし」

「オレは一方通行じゃない。只似てるだけだ。それより帝王って言
われてる奴は」

「こっちにいるぜえ」

後ろから声が話された為、直ぐ様後ろへ振り返る。そこには緑髪の
ツンツン頭の青年が立っていた。

「君がグリフィスの首領あたまの帝王か？」

青年・帝王はハハハツと弱者をあざけ笑うような笑いをすると倒れている少年の頭を踏み付け

「そうだよ。てか、人の駒をこんなにしてさ正義のヒーロー気取り？笑っちゃうね」

「オレにヒーローっていう綺麗な言葉は合わないぜ。しいて言うなら悪魔だな」

「ヒヒヒヒツこりゃ面白いなあ。まあ悪魔とかヒーローとか関係ないけどねえ？」

帝王は一時停止サスの目をじっくり見ながら間合いを計っている。一時停止はポケットに手を入れると

「美学が足ンないな。こんなんで帝王になったと思っただけなのか？」

「思ってるよ。何故なら」

帝王は両手を広げると周りに倒れている少年少女達がムクツと立ち上がりゆっくり一時停止サスペンドに近づいてくる。

「精神系能力者か……」

「僕の能力は『コントローラー電磁支配』僕の下にいる人は全員僕の支配下に置けるのさ。たとえば仮死状態でも脳に直接に信号を送れるから関係ないんだ」

「人を操って王様気取りとか頭逝かれてんじゃねエのか？そんな位で勝ち誇ってんじゃねエよポンコツ」

「うるさい!」

帝王は軽く何かを口ずさむと少年少女達は一時停止サスペンドに襲い掛かる。
しかし

「オマエは学習能力がないのか?」

襲い掛かる少年少女達は一時停止サスペンドに触れる手前でがちりと固まっている。それはまるでテレビの一時停止に近い状況だ。帝王は軽く冷や汗をかきながらも堅い笑みを浮かべ

「ホントめんどくせエ仕事させやがって……壊滅サスペンドって言われたからよオ。オマエ……」

「死ねよ」

一時停止サスペンドは辺りの床下に落ちている鋭利なガラスの破片を拾い帝王

に向け投げようとする。

しかし、洗脳した少年少女達を前に来させ自身を守る壁を作る。一時停止は仕方なく帝王とは全く別な方へ向け投げる。その姿を見た帝王はガハハハと笑い

「人を盾にされちゃ攻撃出来ないんですかあ？」

「やはりオマエはポンコツだなア。オレの能力は触れた物体を停止それを掌握・干渉出来るンだけ。オマエがオレにコイツらで攻撃したお陰で、コイツらの操作を停止出来る。しかし、オマエの能力は電撃使いの派生系でよかつたぜ。オマエは脳に微弱な電磁波を送る事で神経の伝達を操作したつつう事だったとはな」

すると盾になっていた少年少女達はバタリと倒れていく。防ぐ術がないが投げたガラスは自身に当たらない方向へ投げた事に気付きにやけ

「だが、あのガラスを飛ばしたのは誤算だったなあ。当たんなきゃオレを殺せないぜ、適当に投げちゃ意味ねえよ」

勝ち誇ったように話を進めるが一時停止は軽く頭を抱える。頭が痛いわけではない、帝王の推理力に呆れているのだ。

「やはりオマエはポンコツ以下、クズだなア。オレの投げたガラスにはもう干渉済みだ。後ろ見れば分かる」

帝王は後ろを振り返る。そこには空中に無数のガラスが宙に浮いていた。一時停止サスペンドの能力である触れた物質の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る事。それは自身が持つ物質も干渉、掌握出来るという事になる。

その理由から一時停止サスペンドが放ったガラスが空間で止まる事が分かる。それを見た帝王は驚愕した顔へ変化し

「絶望を味わえポンコツ王様」

するとガラスは帝王にめがけて真っ直ぐ飛んでいく。避ける術がない帝王はガラスの破片を背中で受け止め、口からは吐血が吐き出される。背中の痛みに耐え切れず片膝を付き一時停止サスペンドを睨み付ける。

「結局……君は……何者なん……だ……」

薄目で開いてる帝王の瞳を見ながら

「オレは裏学園都市の第一位の一時停止。サスペンド名の通り身体に触れるあらゆる向き（ベクトル）を停止、それを干渉、掌握する事が出来る超能力者だ」

「超能力者……八人目だと……」

帝王は意識が途切れその場に倒れる。背中からは深紅の液体が今も流れている。一時停止はチツと舌打ちすると学ランの少年に近付くと学ランを掴み

「今回はグリフィスの壊滅だったから見逃してやるが次にオレと会ったら命はねえからな。人生こんな変な場所にいねえで平凡な世界で暮らしてな」

「ひっ!?!?うわあああああああ!?!?!?!?!」

手を離すと少年は逃げるようにその場から離れていく。それを気にせず踵を返し道路に出ると携帯が震えだす。携帯を取り出すと『登録1』とかかかっている。通話ボタンを押し耳に当てると何時もの声が聞こえる。

『任務は終わったみたいだな』

「ああ。首領あたま以外は殺してねえがいいよな」

『まあいい。今日は終わりだ。家でゆっくり休んでくれ』

梶原から切ると一時停止サスペンドはポケットにしまい薄暗い夜街を足音をたてながら歩いていく。

第一章 壊滅任務 Annihilation duty (後書き)

前回と云うかダメな小説を読んでくださった方はお久しぶりです。
初めて読む方は初めまして。

目黒です。

今回の作品は私が11月に書いた作品『とある科学の一時停止』を
訂正、編集させた物語です。

11月の時期に書いた時は能力も滅茶苦茶で展開が早いも何ので視
聴者さんに迷惑をかけました。

まだそのような事が残っていて理不尽な展開や一時停止のムチャク
チャな能力に付き合っサスペンドて下さると有り難いです。

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじゃねえか。」

裏学園都市第一位

一時停止 サスペンド

第二章 襲撃と過去 An attack and the past

グリフィスを壊滅してから数時間が経ち午前1時過ぎ。第四学区から歩いて帰ってきた為かもう深夜になってしまっていた。一時停止サスペンドは夕飯を食べていないせいとお腹がすいた為第七学区のあるコンビニに立ち寄りミートソースと炭酸飲料を購入すると再び夜街を歩こうとするが

「よお、こんな時間まで遊んでるとかいい根性してんなあ」

「選択肢は二つだ。財布を渡さずボコられるか財布を渡してボコられ

一時停止サスペンドの前に現れた数人の少年達はヘラヘラと笑いながら近づいてくる。二人目が喋りだすと一時停止サスペンドは近くにあった石ころを右に蹴り飛ばし自身の能力で石ころを停止させ二人目の少年の顎へ当たる方向へ飛んでいく。そんな事に気付かなかった少年は石ころを直撃するとアップパーを食らったように放物線を描いて飛ぶと気絶してしまう。

「野郎……調子に」

少年達の坊主の少年が一時停止サスペンドに触れようとするが触れる直前に止まってしまふ。一時停止サスペンドは片目を瞑りながら

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじゃねえか。だがな、喧嘩を売った相手が悪かったなオマエ達の仲間を簡単に殺す事が出来んだ。コイツを殺されたくねえなら理由を説明しろ。は自分では言いたくねえがオレはある奴に似てるって言われてんだ、この姿を見て分かるよな？」

その後、少年達をその場で正座をさせ理由を聞いた。どうやら、学園都市最強の超能力者・一方通行アケボノレータが無能力者に負けたという噂が流れたらしく今なら勝てるかもしれないと襲い掛かったらしい。

(まったく、学園都市最強の名が廃ってんな)

一時停止サスペンドは頭を掻きながら少年達を立たせる。少年達は逃げるようにその場を後にする。実際、本当に学園都市最強の超能力者が無能力者に負ける事が信じられなかった。

一時停止は無意味な情報に頭を抱えながら自宅へ向かう。一時停止は第七学区にあるマンションに到着すると七階までエレベーターで上がりある一室に入る。そこは上層部から支給された最大限に暮らせる空間だった。軽く個人的な物もあるが。

一時停止はテーブルにミートソースと炭酸飲料を置くとシャワー室へ向かい服を脱ぎシャワーを浴びる。肌に丁度いい温度のお湯を浴びながら一時停止はふと思う。

(オレって正式に超能力者になれないのか?)

毎回思う疑問だがつついっついでしてしまう。一時停止はその疑問を忘れるかのように身体を洗いシャワー室を出る。新しい服に着替え時計を確認する。時刻は午前4時、完全に朝を迎えていた。

買ったミートソースを朝飯にするのもいいだろうと電子レンジで温めると蓋を開けプラスチックのフォークで絡め取り口に運ぶ。それを何度か繰り返し炭酸飲料を開けトマトと肉の味がこびり付いた口を爽やかなグレープで綺麗にする。そして再びフォークで絡め取りミートソースを頬張る。

ミートソースを食べ終わるとゴミ袋に食べ終わったフォークと皿を放り込み炭酸飲料を冷蔵庫にしまつとベッドに寝転がり普通の人は起きる時間に目を瞑り夢に落ちていく。

*

学園都市にしては広大な土地が存在する。その土地の真ん中には全体が白に染められた建物がぽつりと建っていた。

第3能力開発施設。

この施設では学園都市に来た子供が、能力者の素質があるかないかを調べるためにある。

そして今日も能力開発を行う子供が来た。とある少年もその中にいる。

「僕は強い能力者になるんだ!!」

少年は白衣を着た女性を見ながら言った。

「強くなるのはいいけど喧嘩はして欲しくないなあー」

女性は機会仕掛けのベッドに寝ている少年に言う。

「喧嘩はしないよー、お姉ちゃんを守るんだよ!」

楽しみだわ、と言う女性。

「そろそろ始めるぞ」

男の声が聞こえて、慌てて少年に脳波を計るための機械を頭に装着

させる。

「じゃあね」

笑顔でどこかに行く女性の姿は、忘れられなかった。

この後の出来事で、本当にさようならをすることになるとは知らずに……。

数時間が経った頃、施設に耳障りな警報音が鳴り響く。

「一号機から五号機に異常が発生しました！」

研究員が叫ぶ。

「脳波に以上が起きています!!」

「心拍数が上がってます！！危険ですよ」

「これ以上は無理です」

次々に発生する事態に研究員のリーダーは

「続けます」

冷たい一言だった。しかし、それに異議を唱える者がいる。

「それじゃあの子達はどくなるんですか！」

女性は抗議をしたが中止にしようとしなない。その時の少年は変な夢を見ていた。

何もない闇の空間。
少年は孤独だった。頭が痛い。

（お姉ちゃん助けて…）

頭痛の中で少年は光を見た

そして少年は無意識に光に向かって腕を伸ばす。

ピーーーー！！

研究施設に無情にも、残酷な音が響いた。能力開発の失敗。
男女合わせて五人の子供の死亡が確認された。女性は自らの無念に
泣いている。

「子供の遺体はアンチスキルに連絡をして引き取ってもらおう」

研究員のリーダーはまるで何事もなかったかのように呟いた。しかし、その直後だった。

ピー、ピー、ピー

絶望に満ちた空間に再び音が鳴り響いた。

「き……奇跡です、一人の少年が生きています！」

一人の研究員が動揺の声を漏らすと、他の研究員達がざわめき始めた。そして

第3能力開発施設は謎の爆発を起こした。

アンチスキルが到着した時には施設の形どころか、残骸すらなかった。幸いにも広い土地のおかげで、被害は施設だけで済む。

少年は廃墟となった場所にただ1人立っていた。少年は知らぬ内に瞳から涙が滴り落ちていた。少年は残骸の中にあるネームプレートを見て。それはあの女性のネームプレートだった。

「うっ……、うわあああああああ……!!!!!!」

*

目が覚めベッドから起き上がる。瞳から涙が出ている事に気付くと直ぐ様拭き取り

（またあの夢か……。思い出したくねえ過去を引きずるモンじゃねえな）

寝癖をつけながら携帯を見る。時刻は午後1時32分、時刻を見た後洗面所で寝癖を直し歯を磨く。磨き終わるとソファーに座りテレビを点け見ていると携帯が震えだす。通話ボタンを押し耳に当て

「今日は何だ？」

『まあ任務の内容と話したい事があったな』

梶原は淡々と喋る。それを無言で聞く一時停止。サスペンド

『まずは任務の内容からだ』

どうも、目黒です。

今回は一時停止サスペンドの自宅や食生活、過去を描きました。

過去と言っても前作の序章と同じ過去です。今回は戦闘回ではなかったのであまり戦闘描写を書いていませんがご不満があると思いますよね……………。

今回は梶原が最後に言った新たな任務についてです。

引き続きお読みになってください。

「くっだらねエオモチャで遊んでる暇あんなら大人しく召されるポ
ンコツが」

裏学園都市第一位

サスペンド
一時停止

ここは第一一学区のある倉庫。この学区は学園都市外周に面している学区の中で、物資の搬入が盛んな学区である。表面上では物資の搬入というが裏では学園都市で創られた物の密輸などが行っている場所でもある。

ある倉庫も学園都市外の物資を密輸しているグループが所在する所である。一時停止は倉庫の中で対峙していた。

「調子乗んなよ学園都市第一位。オレ達には最大の武器があんだぜ」

黒スーツを着た男がニヤリと笑い一時停止に間合いを詰める。男には発条包帯と呼ばれる超音波伸縮性の軍用特殊テーピングが装着されている。それを着けると運動能力が飛躍的に向上する。普通の人間だと発条包帯を装着した男に勝てる訳がないが一時停止は違った。

「何か変な自信があるみてエだが、オレの前じゃ無意味つつう事を分かれよ」

一時停止は首をパキポキと鳴らしながらその場に立っている。男はそのまま一時停止の顔面に向けて蹴りを放つ。しかし、男の足は一

時停止の顔面を捉えていなかった。男の足は顔面に当たる直前に止まっていたのだ。

「くっだらねエオモチャで遊んでる暇あんなら大人しく召されるボンコツが」

一時停止サスペンドは男の足を掴み男の神経の伝達を停止させる。男はドサツとその場に倒れる。他の男達は一時停止サスペンドが行った事に不可解だった。理由は簡単だ。彼らは学園都市外の人間だからだ。男達は銃口を一時停止サスペンドに向ける。

「動くな！！動いたら撃つぞ」

一時停止サスペンドは銃口を構える男達を見渡すと

「どうせ学園都市外の人間だろ？いいモン見せてやるよ」

一時停止サスペンドはお構いなしに男達に向かって歩きだす。男達は躊躇せず

一時停止に発砲する。しかし、一時停止に傷一つつかない。弾丸が
全て停止しているからだ。その光景を見た男達は驚愕し後退りする。

「なっ……！！？あり得ない……」

「これがあり得るんだよ。これが学園都市だ、外部の人間には分かんねえだろうがなア！！」

弾丸は男達全員に向け再び動き出す。男達は弾丸を食らい赤い液体を流しながらその場に倒れていく。

一時停止はそそくさと倉庫から出ると携帯を取り出しある場所にかける。
ワンコールの後にすぐ繋がります。

「オレだ。任務を終えた」

『了解しました。帰投して下さい』

一時停止サスペンドと話しているのは梶原ではなく女の声だった。一時停止は電話を切るとチツと舌打ちをしながら第一一学区の倉庫を後にする。

*

『まずは任務の内容だ』

『任務と言うか実験に参加して貰いたいんだ』

「実験？」

『まず超能力者の第三位である超電磁砲レールガンの量産を目指す』
『量産能力者計画イヌ』を知っているな？そいつらを使った実験』

「『絶対能力進化（レベル6シフト）実験』だろ？そんぐらいは分かる」

そうか……とボソツと呟くが梶原は続けて

『『置き去り』に『体晶』を用いて意図的に能力を暴走させ、そのデータを得るといふ』暴走能力の法則解析用誘爆実験』が行われていたんだが、まあ実験者達は『置き去り』を使いたくないらしいんだ。何か事件が起きたらしくてな。んでだ、その実験を妹達シスターズに使用させた実験『能力体結晶投与実験』ファーストサンプルに参加してくれないか？』

「『ファーストサンプル能力体結晶投与実験』？」

『詳しくは知らないんだが、『体晶』を用いた実験らしいんだが……』

「それ以前になんで妹達シスターズを使うんだ？アイツ等は『絶対能力進化（レベル6シフト）実験』が凍結してから使われなくなったんじゃないのか？」

『さあな。『体晶』は君も知ってる通り能力を底上げする言わば『レベルアップ幻想御手』みたいなモンだ。これを使用すれば能力に伸び悩む生徒達が飛躍的に能力が向上するんだ。だが、まだ実験段階で暴走する恐れがあるのだよ。そこで『シスターズ妹達』に使用して実験しようって事だ、たかがクローンに生きる資格はないだろ？だから利用するのさ』

「そんな命を易々と消していいのかよ。オレの知ったこっちゃねえが……んで何故オレが利用されんだ？」

『さつき言った通り『体晶』を使うと暴走する恐れがあるんだ。もしこれを実戦で使えればとサスペンド言うことで一時停止と『体晶』を使用した『シスターズ妹達』を500通りの戦闘させようということだ。しかも妹達を殺していいと許可が降りたしな。お前にとっては簡単な事だろ？』

「まあな。結局は『体晶』を使用した『シスターズ妹達』を500回殺せばいいんだろ？」

『そういう事だ。明日から始まるから場所と時刻を教えてやる、それと』

すると言葉が詰まる梶原。一時停止サスペンドは何故言葉が詰まったか分からなかったが次に言う言葉で理解が出来た。

『今回以降俺は上層部の請け負いを辞めにしたんだ。明日からは新たな奴だから宜しくな』

「ああ。梶原あ」

『ん？何だ、悲しい台詞でも言ってみろ大笑いしてやるから』

チツと舌打ちすると通話を切ってしまう。人との別れはよくやるがあまり慣れない。一時停止サスペンドは携帯をしまつと部屋を出ていく。

*

第一一学区で密輸グループの排除を終えて現在午後4時

梶原からメールが届き実験開始時刻は午後9時、行う場所は第七学区にある公園と意外な場所で行われる事に少し驚いていた。

一時停止は第七学区にある実験が行われる場所と違う公園にいた。
今時期は午後4時でも明るく軽く赤みがあった空色であった
空を見上げながら一時停止は自販機で買った炭酸飲料を口にする。

(体晶か……上層部の奴等も馬鹿な事をするもんだな。弱者は弱者らしい生き方があるのによ……)

炭酸飲料を口に含み飲み込む。口に含んだ時に起きる炭酸と少し酸味が効いたレモンの味がとても心地よいのだが今はそんな事を思っ
てなどいなかった。

遠くにはまだ完全下校時刻ではないのか小学生がサッカーボールを
用いて遊んでいるのが見える。
その姿を見ている一時停止は

(オレも昔はあんな事がしたい時期があったな。『暗闇の五月計画』
に参加し能力が向上すれば一般の学校に入れると信じてたのに現状

はこれだ。つたく過去を思い出すと笑えてくるぜ)

サスペンド
一時停止は小学生の姿を見て思う。

昔、一時停止は『置き去り(チャイルドエラー)』という入学した生徒が都市内に住居を持つ事となる学園都市の制度を利用し入学費のみ払って子供を寮に入れ、その後に行方を眩ます行為をされた。学園都市には置き去りにされた子供を保護する制度が存在するが、それを逆手に取り非人道的実験を行う研究チームも存在する。

サスペンド
一時停止もその1人であった。昔は家族と暮らしていたのに学園都市に來た途端に行方が分からなくなってしまったのだ。一時停止はサスペンド研究施設で保護されていたが、学園都市最強の超能力者である一方通行の演算パターンを参考に、各能力者の自分だけの現実を最適化バーンナルリアリテイ能力者の性能を向上させようというプロジェクト『暗闇の五月計画』に参加されたのだ。

「一方通行の精神性・演算方法の一部を意図的に植え付ける」という、個人の人格を他者の都合で蹂躪する非人道的な暗部らしい計画である計画は一時停止サスペンドの現在の能力に逸材する。

アクセラレータ一方通行の防護性としてデフォルトで最低限の外的影力を停止させ、攻撃性として触れた物体を干渉し掌握する事を可能としていた。他に能力を使う時には一方通行アクセラレータと同じ口調になってしまい、デフォルトで停止させている為紫外線を停止させている事で色素を失い、華奢な身体になってしまい一方通行アクセラレータと瓜二つとなってしまったのだ。

お陰で不良集団からは狙われるし一般の人まで怯えられてしまいい友を作る事さえも出来ない。

話は戻し現在は公園、炭酸飲料を飲んでいる一時停止^{サスペンド}。すると足下にボールが転がっている、前を見ると小学生が手を振っている。どうやらボールを取ってほしいらしい

一時停止^{サスペンド}はボールを掴み軽く上に投げ掌握した為少し停止するとちよつどいいように小学生の方へ飛んでいく。

小学生達は「ありがとうございます」とお礼を言つと他の小学生達と遊び始めた。

一時停止^{サスペンド}はチツと舌打ちすると炭酸飲料を飲み終えゴミ箱に捨てる

と公園を出て違う場所の公園へ向かう。

どうも、目黒です。

今回は実験の内容と一時停止サスペンドの息抜き、軽い任務という内容を書きました。ページ数が少なくて申し訳ありません。

駄文すぎてアンチな方もいらっしやるかもしれませんが挫けずに書き続けるんで応援してくれる方もアンチな方も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610z/>

とある科学の一時停止(サスペンド)

2012年1月3日00時59分発行